

大学生による雨の捉え方の傾向把握

阿部生¹・尾野薫²

¹学生会員 博士前期 徳島大学大学院 (〒770-8506 徳島県徳島市南常三島町2-1,
E-mail:sho1201sho1201@gmail.com)

²正会員 博士 (工) 徳島大学大学院 (〒770-8506 徳島県徳島市南常三島町2-1,
E-mail:kaoru_o@ce.tokushima-u.ac.jp)

本研究では、現代における雨に対するイメージやその捉え方の実態について一示唆を得るために、大学生を対象として雨の捉え方の傾向を把握することを目的とする。まず、①雨のふるまえを対象とした記述調査により雨の知覚方法を、②雨宿りを対象とした描画調査によって風景イメージの傾向を明らかにした。また、グループでの対話調査結果から対話マップを作成し、①雨のふるまえと②雨宿りのイメージの傾向を把握した。その結果、大学生による雨の捉え方について五感による知覚や風景イメージの構成要素を明らかにすることができた。また、対話調査と記述描画調査の結果では、同じ内容だけでなく新しいイメージも出現していたことから、複数手法による調査が必要であることがわかった。

キーワード: 雨, 五感, 知覚方法, 風景イメージ, 対話マップ

1. はじめに

(1) 背景・目的

日本には400以上に及ぶ雨の言葉の数がある¹⁾。強さ、降り方、季節、などによって使い分けており、日本人は雨を細やかにとらえる鋭い感覚を有していると言われて²⁾。また、俳句・詩・水墨画・浮世絵などの作品においても、古来より雨の情景を描いた多くの作品が生み出されてきた。雨のもたらす風景的效果、とりわけ雨の視覚的な現象を写實的に表現するという方向に、画家の目が本格的に向けられるようになったのは、華嚴宗祖師絵伝や久能寺経などの一部の絵巻物を除けば、中世の水墨画の頃からであるとされている³⁾。

また、現代でもテレビ・映画・絵画・小説などでシリアスな作品には雨のシーンが用いられることもあり、現代においても雨を風景的效果として利用していると考えることができる。一方で、現代ではあまり使われていない雨の言葉があることや、すでに消えてしまった、あるいは風前の灯となっている雨の漢語があると小林は指摘している⁴⁾。また、現代の日本人は雨に対して、人々の行動を制限するもの、災害を引き起こすものといったイメージを持っている。現代は都市整備が進み、雨を含め自然に接する機会が減少しているとも言われている。これまで雨の現象に関する研究としては、大気環境が地域の環境に及ぼす影響を解明するという気象学的に扱った研究が多々見られる⁵⁾。また、人文社会科学では雨と

いう現象の文化的・社会的意味を捉える研究⁶⁾や、工学では雨水の制御や処理という、気象現象を制御するなどの研究⁷⁾が数多くされてきている。こういった雨を制御するだけではなく、グリーンインフラなどのように雨を利用した空間整備などが実践されつつある⁸⁾。以上のことから、日本人が古来より有している雨に対するイメージやその捉え方に変化が生じているのではないだろうか。これについて、明らかにするためには、現代における実態を理解することが必要である。

以上より、本研究では現代における雨に対するイメージやその捉え方の実態について一示唆を得るために、大学生を対象として雨の捉え方の傾向を把握することを目的とする。

(2) 既往研究整理

小林の景観の移ろい効果に関する基礎的研究では、時刻・季節・天候の各変動に関わる語彙を収集し類型化した。特に気象的景観の場合は、時刻性、季節性、場所性、程度、様子等が認識され、その評価は初めて起こる現象や程度の弱いものや現象が直接身体に関わらない時は好ましいものと考えられ、激しい時や直接身体に関わる時には好まれない等のことが分かった⁹⁾。また、小林の気象景観体験における感覚印象操作の可能性に関する考察では、気象景観体験について、「気象景観把握モデル」を示し、主体(身体)と景観対象との空間的關係を、また、感覚の働きの考察により、五感による体験の動態

と認識の過程を説明した。さらに、その内容を基本フレームとして気象景観の操作が可能であることを示した¹⁰⁾。

これまで、人々が風景をどう捉えるかについての研究は数多くなされてきた。そのなかで調査手法に関してみていくと、個人に対して調査したものが多いとある。

既往研究として個人に着目したものとして、堀らの体験された風景の構造では、風景の絵と説明文を自由記述方式で書かせる手法により、記憶された風景を呼び起こし、その記憶の全体像を構造的に把握することで、風景の種類による各要因の重みを明らかにした¹¹⁾。また、徳本らによる雨宿り空間の心理評価に関する研究では、雨宿りの空間画像40枚を液晶プロジェクターに映写し、画像ごとに評価を行った。評価に関しては、空間の全体的な印象を尋ねる総合的評価、公共性などに関する個別的评价の他、空間の視覚的印象を問うものとして、SD法によるイメージ評価を行っている¹²⁾。このように、個人で捉えた風景やイメージについて分析し、知見を得る研究は数多く行われている。しかし、写真とアンケートを使った手法では、雨がふらないと調査できないことが考えられるため、本研究ではイメージの調査を行うこととした。また、風景的効果について考えていくためには、一個人の捉え方だけではなく、その風景やイメージが共有されることも重要であるといえる。よって、本研究では個人の捉え方に加え、グループでの対話によって共有されたイメージについて分析するとともに、個人とグループでの捉え方に違いがあるかについても分析する。同様に、雨にもいろいろあり、それぞれ違いがあるのかを把握するために、本研究では①雨がふるまえ②雨宿りを対象として調査を行った。尚、①雨がふるまえは事前調査でイメージを想起しにくいという意見があったため、記述式アンケートとした。

グループの対話によるイメージとその変化については、吉村の「東関紀行」の分析を通じた動態的風景記述モデルの構築を参考に、変化が分かる分析手法を試みる¹³⁾。

なお、本研究では、記述調査によって得られる結果を知覚方法、描画調査によって得られる結果を風景イメージ、対話調査によって得られる結果をイメージと定義する。

(3) 本研究の流れ

2章で調査概要及び分析手法の整理を行う。3章では①雨がふるまえ、②雨宿りについて傾向を把握する。4章ではグループでの対話での、①雨がふるまえ、②雨宿りについて傾向を把握する。5章で大学生を対象とした雨の捉え方について考察することで、雨に対するイメージやその捉え方に変化が生じているのかに対する一示唆を得ることを目指す。

2. 調査概要及び分析手法

(1) 対象者

実験の対象者は、徳島大学の学生とし、1グループ4人の、計10グループ、40名に対し実験を行なった。アンケートで個人属性として居住経歴を調査し、そこから回答者の出身が都市部か地方部かを判断した。これは都市部と地方部による捉え方の傾向に違いがあるか把握するためである。

都市の人口規模による分類として、巨大都市（500万人以上）、大都市（100万人以上）、中都市（10万人以上）、小都市（10万人未満～5万人）¹⁴⁾があり、本研究では、人口10万人以上を都市部、人口10万人未満を地方部とし、各市町村郡が都市部か地方部かの判断を行なう。各市町村群の人口は平成27年国勢調査人口等基本集計（総務省統計局）を参考にする。居住年数の合計を都市部と地方部ごとに出し、年数の多いほうを回答者の属性とした。対象者一覧を表-1に示す。

(2) 実験手法

表-1 対象者個人属性一覧

		居住経歴（年齢）			個人属性				居住経歴（年齢）					個人属性	
		①	②	③	出身	性別			①	②	③	④	⑤	出身	性別
グループ番号	①	A 神戸市 (0-19)	徳島市 (19-)		都市部	男	グループ番号	⑤	A 大阪府大東市 (0-2)	大阪府枚方市 (2-19)	徳島市 (19-)			都市部	男
		B 神戸市 (0-18)	徳島市 (18-)		都市部	男			B 香川県高松市 (0-18)	徳島市 (18-)				都市部	女
		C 愛媛県新居浜市 (0-18)	徳島市 (19-)		都市部	男			C 岡山県岡山市 (0-18)	徳島市 (18-)				都市部	男
		D 福井県敦賀市 (0-18)	徳島市 (20-)		地方部	男			D 東京都小金井市 (0-3)	岡山県岡山市 (4-5)	東京都中野区 (6-7)	香川県高松市 (7-19)	徳島市 (19-)	都市部	女
	②	A 淡路市 (0-18)	徳島市 (18-)		地方部	男		⑥	A 岡山県玉野市 (0-18)	徳島市 (18-)				地方部	男
		B 徳島県小松島市 (0-)			地方部	男			B 兵庫県姫路市 (0-19)	徳島市 (19-)				都市部	女
		C 兵庫県加古川市 (0-18)	徳島市 (18-)		都市部	男			C 兵庫県加古川市 (0-20)	徳島市 (20-)				都市部	男
		D 兵庫県伊丹市 (0-19)	徳島市 (19-)		都市部	男			D 神戸市 (0-19)	徳島市 (19-)				都市部	女
	③	A 兵庫県南あわじ市 (0-18)	徳島市 (18-)		地方部	男		⑦	A 神戸市 (0-18)	徳島市 (18-)				都市部	男
		B 広島県尾道市 (0-18)	徳島市 (19-)		都市部	男			B 三田市 (0-18)	徳島市 (18-)				都市部	男
		C 愛媛県今治市 (0-18)	香川県 (18-19)	徳島市 (19-)	都市部	男			C 赤穂市 (0-18)	徳島市 (18-)				地方部	男
		D 徳島県阿南市 (0-)			地方部	男			D 鳥取市 (0-18)	徳島市 (18-)				都市部	男
	④	A 兵庫県伊丹市 (0-18)	徳島市 (18-)		都市部	男		⑧	A 徳島市 (0-)					都市部	女
		B 和歌山県和歌山市 (0-18)	徳島市 (18-)		都市部	男			B 兵庫県加西市 (0-18)	徳島市 (18-)				地方部	女
		C 徳島県海陽町 (0-18)	徳島市 (18-)		地方部	男			C 徳島市 (0-)					都市部	女
		D 愛媛県新居浜市 (0-18)	徳島市 (18-)		都市部	男			D 愛媛県松山市 (0-18)	徳島市 (18-)				都市部	女
	⑤	A 兵庫県加古川市 (0-18)	徳島市 (18-)		都市部	男		⑨	A 徳島県三好市 (0-18)	徳島市 (19-)				地方部	女
		B 徳島市 (0-22)			都市部	男			B 神戸市 (0-3)	愛知県清須市 (3-7)	神戸市 (7-18)	徳島市 (19-)		都市部	女
		C 広島県尾道市 (0-18)	徳島市 (18-)		都市部	男			C 香川県さぬき市 (0-18)	徳島市 (18-)				地方部	女
		D 島根県江津市 (0-18)	徳島市 (18-)		地方部	男			D 香川県善通寺市 (0-18)	徳島市 (18-)				地方部	女

本研究では雨の状態として、①雨がふるまえ②雨宿りについて、それぞれのイメージを調査する。調査方法としてはa・bの方法を用いる。また、調査によって得られた結果を都市部・地方部で分け、個人属性による違いも考察する。

a) 記述描画調査

調査は①雨がふるまえ②雨宿り③雨上がりのそれぞれに関する調査用紙を計三枚用いて行なった。

①雨がふるまえに関する調査用紙では、雨がふるまえに感じる項目として考えられる項目をあらかじめ30項目用意し、回答者には各項目に対し当てはまるものにチェックし詳細を記述してもらうといった記述調査の形式とした。図-2に①雨がふるまえの調査用紙を示す。

②雨宿りの風景イメージについては、調査用紙に絵と説明文で自由に書かせる描画調査の形式とした。記憶された風景を喚起する手段はいくつもあるが、回答のフォーマットは決めず、自由に書かせることによって豊かな情報が得られる³⁾と考えられる。

また、①雨がふるまえの記述調査で雨に対するイメージを想起させた後に、②雨宿りの描画調査を実施した。

b) 対話調査

前述の記述描画調査の後に対話調査を行なう。対話のテーマとして、①雨がふるまえ②雨宿りの2つを与えた。事前調査で会話が途切れた時間を参考に、各テーマについて約3分の対話を行なわせる。対話では、グループの各メンバーが持っている各テーマに対するイメージを自由に話し合ってもらふ。

調査方法 a により得られる結果は、個人の経験・知識から想起する感覚で、一方調査方法 b により得られる結果は、集団での対話により誘発・連想される感覚であるため、二つの調査方法により得られた結果を比較する。

(3) 分析手法

a) 記述描画調査

調査用紙一枚目の分析では、各項目に描かれている詳細文から、回答者がその項目を五感のどれで捉えているかを判断し、表にまとめ、完成した表と回答者の個人属性とを照らし合わせ、個人属性による捉え方の違いを比較する。調査用紙二枚目・三枚目の分析は、自由記述によって書かれた絵の内容を構造化し捉える³⁾。

b) 対話調査

「東関紀行」の分析を通じた動態的風景記述モデルの構築⁹⁾を参考に、対話の流れを時系列に沿ってまとめ、矢印などの記号を用いて対話内容のそれぞれの関係性を見る。また対話内容の好悪のイメージによる色分けや、五感の分類も行なう。

雨の捉え方に関するアンケート

● 年齢 _____才

● 居住経歴 _____

例 0～18才 ○県○市
18才～ ○県○市

1. 「雨が降りそうだな、降ってきたな」と、どのようなことで感じますか？
当てはまるものは□にチェックをして（ ）内に詳細を書いてください。
また、室内・室外、または両方のどこで感じるかに○をしてください。

例 □ 雲の種類 (低い雲が垂れ込めている)

室内・室外○両方

□ 風の強さ (窓がゆれる、すさまじい風が吹く)

室内○ 室外・両方

□ 他人の様子 (傘を持つ、上を見上げる)

室内○ 室外○ 両方

□ 雲の種類 ()	□ 湿度 ()	室内・室外・両方
□ 雲の位置 ()	□ 気温 ()	室内・室外・両方
□ 雲の色 ()	□ 気圧 ()	室内・室外・両方
□ 明暗 ()	□ 頭痛 ()	室内・室外・両方
□ 川の水量 ()	□ 腹痛 ()	室内・室外・両方
□ 川の水音 ()	□ 気だるさ ()	室内・室外・両方
□ 雷の音 ()	□ 古傷の痛み ()	室内・室外・両方
□ 雷の光 ()	□ 他人の様子 ()	室内・室外・両方
□ 風の強さ ()	□ 動物の行動 ()	室内・室外・両方
□ 風向き ()	□ てらてる坊主 ()	室内・室外・両方
□ 風の温度 ()	□ 雨の最初の一粒 ()	室内・室外・両方
□ 山の感じ ()	□ 窓の水滴 ()	室内・室外・両方
□ 海の感じ ()	□ 水面の波紋 ()	室内・室外・両方
□ 山・海・雲の関係 ()	□ 屋根に当たる雨 ()	室内・室外・両方
□ 匂い ()	□ 音 ()	室内・室外・両方

他にも自由に書いてください。

図-1 記述用紙一枚目

3. 記述・描画調査による雨の捉え方の傾向把握

(1) 本章の目的

記述調査により①雨のふるまへの知覚方法、描画調査により②雨宿りの風景イメージの傾向を把握する。

(2) ①雨のふるまえの知覚方法の傾向

回答の集計結果を表-2に示す。これより視覚が最も多く回答されていた。また、小林も五感による雨の捉え方について論じていることから、本研究でも同様に五感に着目することとした。

また、都市部と地方部で比較を行う際に、回答数だけでは比較できないため、回答出現割合を(1)の式により算出した。表-3、表-4に結果を示す。

$$\text{回答出現割合} = \frac{A}{A + \left(\frac{a}{b}B\right)} \times 100(\%) \quad (1)$$

A: 都市部回答出現回数 (回) a: 都市部の人数 (人)

B: 地方部回答出現回数 (回) b: 地方部の人数 (人)

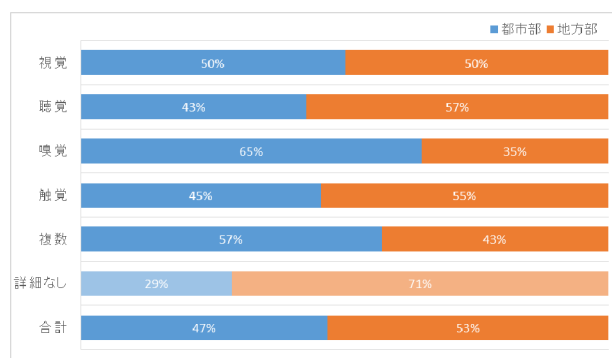
表-2 記述用紙一枚目の回答集計結果

	視覚	触覚	聴覚	嗅覚	複数	詳細なし	合計
雲の種類	12				1	1	14
雲の位置	12						12
雲の色	32					2	34
明暗	34					2	36
川の水量	6						6
川の水音			2			2	4
雷の音			14			5	19
雷の光	6					3	9
風の強さ		10	1		4		15
風向き		1					1
風の温度		11					11
山の感じ	4						4
海の感じ	7						7
山・海・雲の関係	1						1
匂い				24		4	28
湿度		21			2	2	25
気温		14					14
気圧		4					4
頭痛		5					5
腹痛		1					1
気だるさ		8					8
古傷の痛み		3					3
他人の様子	12		1				13
動物の行動	4		4				8
てるてる坊主	1				3	1	5
雨の最初の一粒	2	4			3	3	12
窓の水滴	5				1	2	8
水面の波紋	7				1	3	11
屋根に当たる雨			18			2	20
音			11			1	12
合計	145	82	51	24	15	33	350

表-3 都市部・地方部での回答出現回数と回答出現割合

	回答出現回数(回)		回答出現割合(%)	
	都市部	地方部	都市部	地方部
雲の種類	9	5	46%	54%
雲の位置	6	6	33%	68%
雲の色	22	12	47%	53%
明暗	23	13	46%	54%
川の水量	4	2	49%	51%
川の水音	2	2	33%	68%
雷の音	12	7	45%	55%
雷の光	7	2	63%	37%
風の強さ	10	5	49%	51%
風向き	1	0	100%	0%
風の温度	8	3	56%	44%
山の感じ	2	2	33%	68%
海の感じ	5	2	55%	45%
山・海・雲の関係	1	0	100%	0%
匂い	20	8	55%	45%
湿度	15	10	42%	58%
気温	8	6	39%	61%
気圧	2	2	33%	68%
頭痛	3	2	42%	58%
腹痛	1	0	100%	0%
気だるさ	5	3	45%	55%
古傷の痛み	2	1	49%	51%
他人の様子	11	2	73%	27%
動物の行動	4	4	33%	68%
てるてる坊主	3	2	42%	58%
雨の最初の一粒	6	6	33%	68%
窓の水滴	6	2	59%	41%
水面の波紋	8	3	56%	44%
屋根に当たる雨	13	7	47%	53%
音	7	5	40%	60%
合計	226	124	47%	53%

表-4 都市部・地方部での回答出現割合(五感)



視覚の回答出現割合は表-4より、都市部50%、地方部50%で同じであった。次に表-3から、視覚に関する項目として「他人の様子」では都市部73%であり地方部より高い。これは、都市部のほうが人口が多いため、雨が降る前に他人の様子を見る機会も、地方部と比べると多いからであると考えられる。また、「雷の光」「窓の水滴」「水面の波紋」についても都市部のほうが地方部より高い結果となった。一方で、都市部では「雲の位置」33%「雲の色」47%「明暗」46%であり地方部より低い結果となった。これは、都市部では高層ビルなどの高さがある建物に視界がさえぎられ、上空にある雲の状態で雨が降る前を判断しないためと考えられる。視覚に関する項目毎で回答率に差はあるが、視覚での回答総数で見ると差はなかった。

聴覚の回答出現割合は表-4より、地方部57%、都市部43%であった。聴覚に関する項目として「音」では表-3より、地方部60%、都市部40%であった。地方部の回答として、「車が走る音」「ポツポツ／シャー」「雨が屋根に当たる音」など、音の表現として多様な感覚があり、知覚方法として雨を音で捉える傾向があることが分かる。また、「川の水音」「雷の音」についても地方部のほうが上回る結果となった。

嗅覚の回答出現割合は表-4より、都市部65%、地方部35%であった。嗅覚に関する項目である「匂い」では、都市部の回答として、「コンクリートをぬらした匂い」、「アスファルトが濡れた匂い」などが多くあり、回答者の周囲にコンクリート造りの建物が多い都市部ではこのような回答が増え、回答率に影響があったと考えられる。

触覚の回答出現割合は表-4より、都市部45%、地方部55%であった。触覚に関する項目には「頭痛」「腹痛」、「気だるさ」「古傷の痛み」など、回答者自身に関わる内的なものが多く、都市部と地方部での差が出にくかったと考えられる。一方で、「湿度」「気温」の項目では地方部の回答率が高かった。これは、山間地域では寒暖差が大きいことなどがあり、この気温の変化によって湿度の感じ方も変わるため、地方部のほうが気温や湿度の

変化には鋭敏であり、このような結果になったと考える。

以上より①雨がふるまえでの、地方部・都市部での個人属性による知覚方法の違いを明らかにした。聴覚に関しては、地方部のほうが都市部より捉える傾向が強く、地方部のほうが、雨を音で捉える感覚が都市部より優れている。また、嗅覚に関しては、都市部のほうが地方部より強く捉える傾向があることがわかった。

(3) 雨宿りの風景イメージ

図-2に調査結果の一例を示す。この風景イメージについて、a)絵のパターン、b)登場人物、c)場所、d)雨の表現方法について(2)と同様に五感に着目しながら分析し、傾向を把握する。

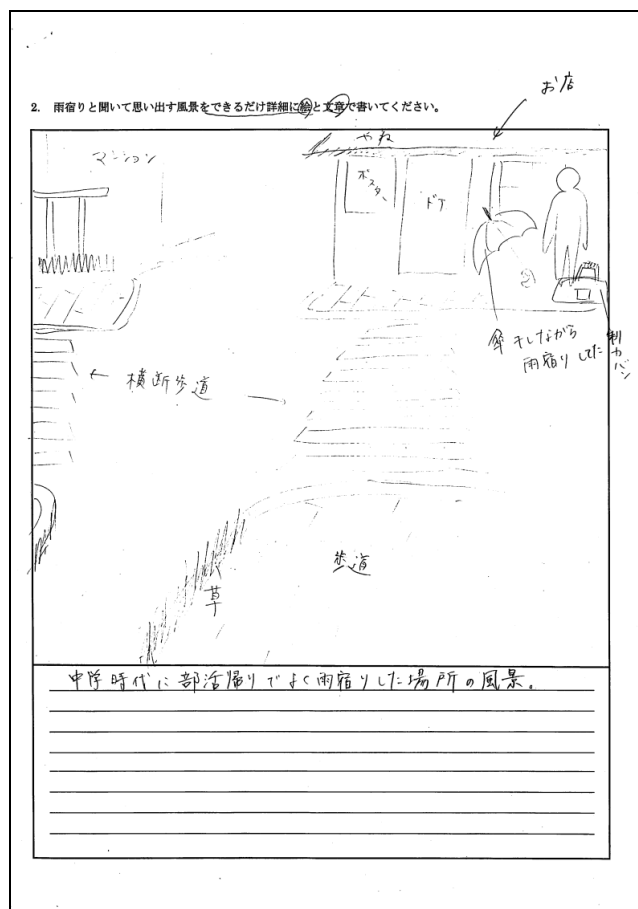


図-2 記述用紙二枚目の回答例

a) 絵のパターン

人を含めて雨宿りの絵を描いているパターンは40人中39人であった。これは、大学生は大学から下宿先までの距離が近く、濡れてでも帰ることが可能であり、日常的に雨宿りをするという経験に乏しいため、自身が雨宿りをしている状況で捉える風景を想像するよりも、客観的に雨宿りをしている人を想像し、その風景描くほうが容易であったのではないかと考えられる。

b) 絵の登場人物

絵の登場人物の描かれ方を分類すると、自分を客観的に描いたもの、他人を描いたもの、自分と他人を客観的に描いたもの、人物なしで描かれているものなどに分類できる。

描かれた人物が回答者自身か他人かを絵と文章の内容から判断することが困難であるパターンは29パターンあった。描かれた人物が回答者自身であると判断できた絵のパターンはあり、その内容は、「高校の時の思い出」「中学時代の部活帰り」など、その絵が回答者の経験を通して描かれている事が分かった。描かれた人物が他人であると判断できた絵のパターン2パターンあり、その全てが映画のワンシーンであった。

登場人物の人数は、1人の場合が21パターン、2人の場合は12パターン、複数の場合は3パターンであった。登場人物が1人である場合の特徴としては、説明文に「急に激しい雨」「雨が止むのを待っている」など書かれているものが多くあった。1人の状態では急に降ってくる雨に対して、マイナスのイメージが多く持たれていることが考えられる。

次に登場人物が2人である場合は12パターンであった。一番多いパターンは男女2人であり、8パターンあった。また、その男女の中でも「カップル」「片思いの人」とがあり、雨宿りの風景イメージでは「男女の偶然の出会い」「自分の彼女との青春の思い出のイメージ」といった場面が書かれたものが多かった。その他には、2人の会社員が1パターン、親子が1パターンであった。

登場人物が複数(3人以上)である場合は、「駅の入りに立ち往生している人々」「大きな木の下に集まる人々」「傘がない人が雨宿りしているのに対し傘を差し歩いている人々がいる」の3パターンであった。

c) 雨宿りの場所

回答者の中に1人で3カ所書いた者が居り、雨宿りの場所の総数は42箇所となった。

雨宿り場所として、建物の軒下を描いた回答者が15人で一番多かった。「急に激しい雨」、「雨が止むのを待っている」などの回答から、雨宿りというと急に降って来た雨に対し、近くにある建物の軒下で一時的に雨をしのぐといったイメージからこのような結果になったと考えられる。都市部と地方部の回答数に着目してみると、地方部のほうが割合が高かった。これは、都市部のほうの雨宿り場所の回答数全体を見ると場所ごとの人数の集中が少なく分散しているのに対し、地方部では建物の軒下に集中しており、このことから都市部のほうが雨宿りの場所のイメージが豊富であることが考えられるためである。また、男女の回答数にも違いが見られ、女性のほうが男性の割合よりも高かった。

バス停を描いた回答者は10人と二番目に回答数が多か

った。バス停の中でも屋根があるものとないものの二つに別れ、屋根があるものでは、「バスは一時間に一本」、
「普段はケータイをいじったりしているけど、何も考えずボーっと雨を見ている感じ」など、ベンチに座りゆっくりとバスを待ちながら雨宿りしているものも多く見られた。屋根がないものでは、映画のワンシーンと、母子でひとつの傘に入り雨宿りをしている場面の二つがあった。文章で「トトロのイメージ」と説明している回答者もあり、映画のシーンの印象が大きく、バス停の回答者はそのイメージを強く受けたと考えられる。

建物の中に入り雨宿りをするという回答者は7人と三番目に回答数が多かった。建物の種類としては、コンビニが3人、駅が3人、カフェが1人であった。都市部と地方部の回答数に着目してみると、都市部のほうが地方部に比べ少し高かった。都市部のほうが急に雨が降ってきたときにすぐに入れる場所が多いため、建物の中に入るというイメージを想起しやすく、このような結果になったと考えられる。

d) 雨の表現の仕方

雨の性質として濡れという視覚的印象とともに音や湿り気などがあり、雨の風景を絵に書くことは難しい³⁾。と言われており、雨の表現の仕方についてもみていく。

雨宿りの風景で雨を絵に表現している回答者は23人であった。17人の回答者は雨の表現はなしであった。雨の表現の仕方として、線で表現するものは18人と、粒で表現するものは3人、両方で表現するものは1人であった。他にも水溜りや雨滴、水面の波紋など雨が降っていることを表現する要素を描いた回答者の数を含めると、25人と過半数を超えており、大学生は雨を視覚的のみに限り表現していることが分かる。また、屋根や傘に当たり飛び散る様子や水面に落ちる雨による波紋など、一粒の雨によって引き起こされる現象を表現している回答者もいた。

以上より②雨宿りに対する風景イメージと、地方部・都市部、男・女の個人属性による捉え方の違いを明らかにした。雨宿りの風景のほとんどが客観的に描かれること。また、雨宿りに関して回答者は、男女の出会いや映画のイメージを持っていることが分かった。

個人属性による違いとして、雨宿りの場所のイメージとしては、地方部では建物の軒下が多く、都市部ではバス停が多いことが分かった。

4. 対話調査からみる雨のイメージの傾向把握

(1) 目的及び分析手法

グループでの対話調査により①雨のふるまえ②雨宿りのイメージについて傾向を把握する。

対話調査を分析するにあたり、吉村らを参考に、対話マップを作成した。文字おこしたものを発言者ごとに整理する。発言内容には「いいイメージ」「悪いイメージ」「どちらでもない」の3パターンがあったため、これを色によって分類した。また、五感に関する発言は実線枠で囲み、本題からそれた発言は点線枠で囲むこととした。対話の流れを可視化するために、矢印による表現を用いた。発言に対する同意の場合は一方向矢印、範囲の場合は双方向矢印、連想の場合は破線矢印、変化は白抜き矢印で表した。図-3に対話調査の結果から作成した対話マップの例を示す。この対話マップをもとに、雨のイメージの傾向を分析する。

(2) 対話マップによる①雨がふるまえのイメージの傾向

まず、出てきたイメージがどの五感で捉えているかを分類する。①雨が降る前の対話内容と②雨宿りの対話内容を比較すると、五感で捉えられたイメージが多くあった。表-5に①雨がふるまえでの五感出現回数、表-6に②雨宿りでの五感出現回数を示す。

表-5 対話調査での五感出現回数（雨がふるまえ）

雨がふるまえ	視覚	触覚	嗅覚	聴覚	合計
プレグループ	2	1	0	0	3
グループ1	1	2	2	1	6
グループ2	2	3	1	1	7
グループ3	2	6	1	0	9
グループ4	5	0	4	0	9
グループ5	4	0	0	1	5
グループ6	5	3	0	0	8
グループ7	4	3	1	1	9
グループ8	5	4	5	0	14
グループ9	4	2	1	3	10
合計	34	24	15	7	80

雨がふる前のイメージとしては視覚によるものが一番多く、その中でも「空が暗くなってくる」が一番多くの割合を占めた。よって雨がふる前に関してはこの「暗くなる」は、多くの人に共通した感覚である。

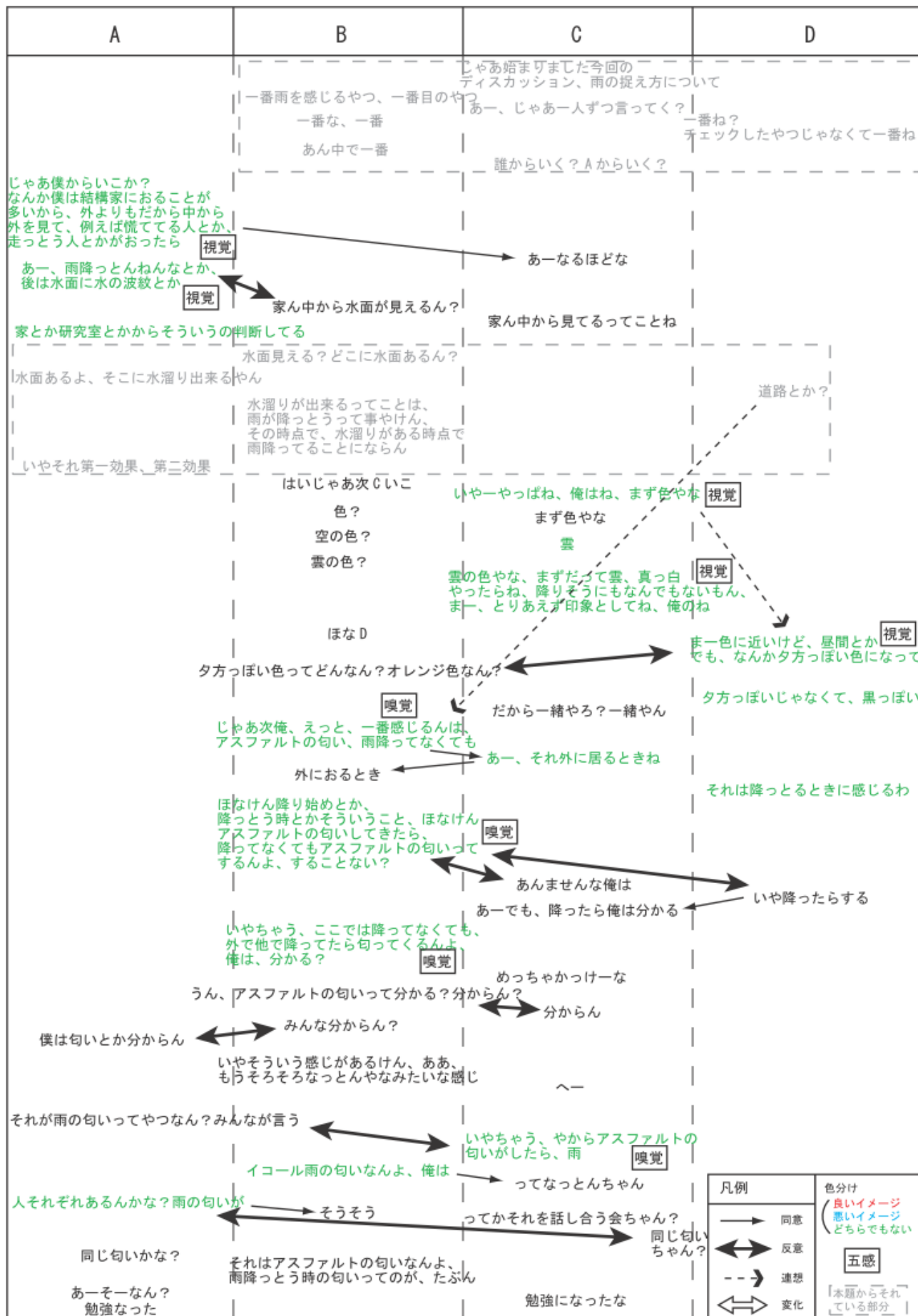


図-3 対話調査の分析例

次に多かったのが触覚によるイメージで、これには悪いイメージが多かった。触覚によるイメージで多かったものとしては、「ジメジメする」、「頭が痛くなる」、「昔怪我したところが痛くなる」など、悪いと思われるイメージばかりである。唯一触覚によるイメージで、雨が降る前に感じる良いイメージとして「空気が冷たくなる感じが好き」というものがあったが、これも「俺は嫌いやな」といった反意があり、多くの人が共感できるものではないと判断できる。

三番目に多かったのが嗅覚によるイメージで、雨が降る前に感じる匂いとして「土臭い」「落ち葉の湿った匂い」「水っぽい匂い」「アスファルトの匂い」「カエル・ミミズが死んだ匂い」「生臭っぽい」など対話の中で、多様な雨の匂いに対する表現が出てきた。中でも「カエル・ミミズが死んだ匂い」「生臭っぽい」などは、記述調査の中には出てこなかった表現であり、これは対話によって連想・触発され生まれた表現であるといえる。雨の匂いについては、いずれの表現に対しても良いイメージを持った人はおらず、どちらかと言うと悪いイメージを持っていることが多かった。

最後に聴覚によるイメージでは、「カエルが鳴く」が一番多かった。これに対しては、同意と反意の両方があり、共感する・しないの意見が分かれるイメージである。聴覚によるイメージでその次に多かったのが「雷がゴロゴロ鳴る」であったが、「時々雷は聞こえるけど、雨は降っていない、雷だけ鳴っていたら、鳴っているだけだろう」といったイメージを持っている人もおり、これに対して同意の意見もあったため、雷の音は雨が降る前に直結していないのではないかとことも考えられる。また、雨の状態を表す擬態語や擬音語については、一般的に前者の方が良い評価を伴う状態の時に使われる⁸⁾。

五感によって捉えられているイメージ以外にも「洗濯物を取り込まないといけない」「急がないといけない」といったようなイメージも対話の中から出現した。また、「天気予報をみる」といった意見から、天気予報で何%から雨が降ると思うかといった議論へと展開していったグループもあり、対話調査を行なうことによって多様なイメージが得られることがわかった。

対話によって得られた雨が降る前に対する五感の出現回数の順は、視覚・触覚・嗅覚・聴覚であり、記述調査では視覚・触覚・聴覚・嗅覚の順であった。上位二つは同じで、聴覚と嗅覚の順が逆であった。

(3) 対話マップによる②雨宿りのイメージの傾向

雨宿りをテーマにした対話では、全てのグループにおいて、雨宿りのイメージを連想・共感させるためのキーワードとして、映画、ドラマ、アニメ、音楽、

CM、などの話題が出現した。このことは、雨宿りのイメージとそういった作品との関連度が非常に高いことを示している。その中でも全10グループ中、7グループでジブリ映画であるとなりのトトロの話が登場した。トトロの映画の中で雨のシーンは2つあり、一つ目はさつきが学校帰りバス停で雨宿りをし、通りすがったカンタが傘を渡してくるところで、二つ目はさつきとメイがバス停で傘を差して、お父さんの帰りを待つところである。討論の中で前者は雨宿りであるが、後者は雨宿りではないと否定する人が多く、そもそも雨宿りとはどういったものかという議論が頻発した。

討論の中で発生した雨宿りとはどういったものかについての意見をまとめると、「雨が降っているので外出しない」「屋根のある場所から、ない場所へと行くのをためらう」「外にいるときに雨が急に降りだし、雨の当たらない場所へと移動する」「お店に入り時間を潰す」「もともと室内に居って雨が降り出したら、そのまま止むまで待つ」「傘はもっていないイメージ」などといったものがあり、グループによって何を雨宿りとするか、しないかの差は大きく、雨宿りの定義はあいまいであることが分かる。

以上より、対話調査の結果と記述描画調査の結果を対応させると、同じ内容だけでなく新しいイメージも出現し分析対象が増加したため、両方の方法を用い調査を行なうことが必要であることがわかる。

しかし、プレ実験グループのDのように、会話量が極端に少ない人物やグループも見受けられ、これは個人の性格やグループの特性が原因であると考えられるが、グループ内の個々の特性までは測りきれない。Dの場合でいうと、アンケートでは十分な量の回答がされているため、実験の方法として一对一の対話などの追加実験を行なうことで、より豊富な情報を得られるであろうと考えられる。

表-6 対話調査での五感出現回数（雨上がり）

雨宿り	視覚	触覚	嗅覚	聴覚	合計
プレグループ	1	0	0	0	1
グループ1	1	0	0	0	1
グループ2	0	0	0	0	0
グループ3	0	0	0	0	0
グループ4	0	0	0	0	0
グループ5	0	0	0	0	0
グループ6	0	0	0	0	0
グループ7	0	0	0	0	0
グループ8	0	0	0	0	0
グループ9	0	2	0	1	3
合計	2	2	0	1	5

5. 大学生による雨の捉え方の傾向

3章では個人に対する調査として、記述調査により①雨がふるまへの雨の知覚方法について、描画調査により②雨宿りの風景イメージについて傾向を把握し、4章では対話調査から①雨がふるまへ②雨宿りのイメージを明らかにした。本章では、これらの結果から大学生による雨の捉え方の傾向について考察する。

a) ①雨がふるまへの考察

雨がふるまへに捉える要素として、記述・対話のどちらも視覚の「暗くなる」が最多であった。次に多いのは触覚の「湿度」、「気温」でこちらも記述・対話に共通するものであった。また、記述調査により得られた雨が降る前に対する五感の出現回数は多い順に、視覚・触覚・聴覚・嗅覚であり、対話調査では、視覚・触覚・嗅覚・聴覚であったため、五感の捉え方の順位にも同じ傾向が見られた。

b) ②雨宿りの考察

雨宿りの要素として、対話では視覚で「滴る水滴」「露」が出現回数が最多であった。記述調査においても雨の表現方法として「屋根から滴る水滴」「水面の波紋」など視覚で捉えられていると思われる要素が出現しており、同じ傾向が見られた。しかし、対話では「映画」や「ドラマ」などのイメージが多く、五感により捉えられているイメージは少なかった。描画でも、「映画のシーン」があり、これも同じ傾向が見られた。また、対話では「男女の会合場所」も多く出現し、記述でも登場人物として「カップル」「男女」が多く出現しており、同じ傾向があると分かる。

以上より、雨がふるまへについては、アンケートによる知覚方法の把握と対話調査によるイメージの把握を行い、この2つの調査結果を比較し、同じ捉え方で出現している要素については雨を捉える要素として、実空間の整備に活用できれば、一般に効果が期待できるものと考えられる。雨宿りについても同様に、描画調査による風景イメージと対話調査によるイメージの把握の結果を比較することで実空間の活用できる要素を得られることができると考える。

6. おわりに

(1) 結論

本研究では現代における雨に対するイメージやその捉え方の実態について一示唆を得るために、大学生を対象として雨の捉え方の傾向を把握することを目的として、記述調査により①雨がふるまへの知覚方法、描画調査に

より②雨宿りの風景イメージの傾向を、グループでの対話調査により①雨がふるまへ②雨宿りのイメージについて傾向を把握することを目指した。得られた結果を以下に示す。

- ・雨のち各方法として、①雨がふるまへでは「暗くなる」「湿度」「気温」が要素となることがわかった。
- ・②雨宿りでは「滴る水滴」「露」「水面の波紋」が挙げられる。
- ・対話調査の結果と記述描画調査の結果を対応させると、新しいイメージも出現し分析対象の増加となり、両方の方法を用い調査を行なうことが必要であることがわかる。

(2) 今後の展望

本研究では雨がふるまへと雨宿りについて調査した。今後は被験者数を増やすことで一般化することが必要であると考えられる。また、対話マップについて検証することも考えている。

また、雨の知覚方法、雨の風景イメージ、雨のイメージのそれぞれの捉え方の関係についてより考察を深める。

参考文献

- 1) 高橋順子, 雨の名前, pp. 152-156 小学館, 2001.
- 2) 小林亨, 雨の景観への招待 名雨のすすめ, pp. 128 彰国社, 1996.
- 3) 同上 (2) pp. 94
- 4) 同上 (2) pp. 106
- 5) 草薙浩, 平年日降水量時系列のクラスター分析による日本の9気候地域区分の提案, 天気, 63巻, 1号, pp. 5-12, 2016
- 6) 城戸由能, 佐藤豪, 中北英一, 都市雨水管理システムの実時間制御におけるXバンド偏波レーダーによる降水予測情報の有効利用方策に関する研究, 土木学会論文集B1 (水工学) Vol. 71 No. 4 pp. 1345-1135, 2015
- 7) 李丹丹, 台湾女流作家・三毛の初期作品「雨季は二度と来ない」について, 信州大学人文社会科学研究, 10巻, pp. 6-17, 2016
- 8) グリーンインフラ研究会, 決定版! グリーンインフラ, pp. 20-23 日経BP社 2017
- 9) 小林亨, 景観の移ろい効果に関する基礎的研究, 造園雑誌, 50巻, 5号, pp. 263-268, 1987.
- 10) 小林亨, 気象景観体験における感覚印象操作の可能性に関する考察, 造園雑誌, 53巻, 5号, pp. 199-204, 1990.
- 11) 堀繁, 栗原正夫, 篠原修, 体験された風景の構造, 造園雑誌 51(5), pp. 287-292, 1988.
- 12) 徳本冬華, 西名大作, 田中貴宏, 雨宿り空間の心

理的評価に関する研究, 日本建築学会環境系論文集, 第79巻 第699号, pp. 393-402, 2014.

- 13) 吉村晶子, 「東関紀行」の分析を通じた動態的風景記述モデルの構築, ランドスケープ研究, 61巻, 5号, pp. 675-680, 1998.
- 14) 日笠端・日端康雄, 都市計画【第三版増補】, pp. 75, 共立出版, 2015.
- 15) 小林亨, 移ろいの景観論 五感・ことば・天気, pp. 145-148 創栄図書印刷, 1994.